



Title	闇の世界『テレーズ・デスケルー』
Author(s)	柏原, 紀久子
Citation	Gallia. 1992, 31, p. 303-312
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11222
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

闇の世界『テレーズ・デスケル』

柏 原 紀 久 子

情念の認識をこととする Mauriac 文学は人心を堕落と罪に誘うものであるとしてカトリック側から痛烈な非難をあびた Mauriac は、「情念について語らぬことによりこれを逼塞しうると信ずるは多くの教育家達の第一の誤謬ではあるまいか。書物も新聞もない修道院の中で育てられても青年となればすべての情念を発見することは疑うべきでない。何故なら彼はそれらすべてを自分の内に持っているからである。悲しいかな我々の内にあるのは神の国のみではない。[……] 青年に危険な夢を見させるのと、気のぬけた嘘によって彼らにキリスト教並びにその教会に対する嫌悪をふきこむのといずれが危険の度が大きいであろうか。」¹⁾と反撃し、情念の認識こそ人をして神に向かわしむるという信念を次の様に表明している。「今日我々が考えている小説は、ますます情念の認識を掘り下げようとする試みである。砂漠の奥に進むにつれて水の欠如がいよいよ仮借なく我々を苦しめ、我々はいっそのどの渴きを感じる。大胆な小説家——大胆というよりもそれ以上の小説家でも我々に自己をよりよく知ることを教える限りにおいて、我々を神に近づけぬような小説家はない。[……] いかなる作家にもその物語の中に、あえて言うならば外部を導入することは許されない。無限の存在は、我々の尺度では量りえない。我々の尺度にあうのは人間である。神の国が見出されるのは、ものの本にも記されているように、人間の中である。[……] 我々としては一つの信仰箇条を実行する腹を決めている。すなわち人間を研究するに当って、常に真実を持するかぎり誤ちを犯さぬと信じている。我々は内面的発見に身を献げている。我々はこの目で見たものは何一つ隠さぬであろう。我々はロシアのある小説家の次の重大な言葉を我々の信条とする。『私は人生を、想像が描く夢の中ではなくその現実の中に追求した。かくして私は生の源泉である〈御方〉に到達した。』²⁾この様に

* 本論における Mauriac の作品の引用の訳については、春秋社版『モーリヤック著作集』の訳を使わせていただきました。

1) François Mauriac, *Oeuvres complètes Tome VIII*, Fayard, 1950-68, p. 283.

2) *Ibid.*, p. 284.

Mauriac は、情念のより深い認識こそ人を神に近らしむることであるという強い自信を表明している。

ところで、この表明の直後に創られ、彼が殺人未遂犯という最もいまわしい罪人の情念の中に深くわけ入ってその魂を照らしだそうとした作品『テレーズ・デスケル』は果して彼が神に到達したと自信をもつと言える作品であろうか。それどころか逆にここでは彼は神を見失おうとしているではないか。

本論ではこの点に注目して、『テレーズ・デスケル』は、彼のそれまでの文学態度に対する自信を覆がえさせ、自らの文学者としてのそれまでの在り方を大きく方向転換せざるを得なくした作品であることを、そして彼のそれまでの信仰態度のあり方にも深い反省を促がせしめ、以後、より深化した信仰へと彼を向かわしめるに至った作品であることを、つまり彼のターニングポイントに立つ作品であることを論じてみたいと思う。

I

まずこの作品が作者がその信仰者としての立場をうち捨て、完全に作中人物となれあい、情念の徹底的研究を目的としたもっとも文学的に野心的な書であることを確認してみたい。

ジャック・マリタンは、小説家はすべて真実を描くべきだが、しかしその際、作者は常に自らの源泉を浄め、決して主題と馴れあうべきではないとして、作者と作中人物との馴れあいをいましめ、次の様に警告を発した。「本質的な問題は、作者がこの描写をする時、どれ位の高度に自分を保っているかを知ることであり、また彼の芸術と心とが暗黙の了解などなしに悪の描写ができる位純粹で強力であるかを知ることである。現代の小説が人間の悲惨の中へ降りてゆけばゆくほど小説家はますます超人間的な美德が要求されてくる。[……]ところがどうだろう、産みだされたものはその対極にあるもので、私たち観察者と観察される者、小説家とその主題が競って汚濁されてゆくのを見るのである。」³⁾ところで、この様に作者と作中人物との馴れ合いをいましめ、作者は高みに立つべきだとするマリタンに対し、Mauriac は、作者と作中人物の馴れあいは芸術の条件そのものであるとして次の様に反論する。「彼が警告を促がしている関係、小説家とその主題との共犯関係は必要不可欠のものなのだ。この共犯関係は私たち芸術の条件そのものをなしている。というのは小説家、眞の小説家は観察者ではなく虚構の創造者だからである。彼は人生を観察してい

3) François Mauriac, *Oeuvres complètes Tome VII*, Fayard, 1950-68, p. 314.

るのではなく、人生を創造し生ける存在をこの世に産みだすのである。高見にあって見下などとは思っていない、彼は自分の創った人物と混じりあおうとする誘惑、ある意味では作中人物の中に自己を無化しようとする誘惑に負ける。つまり自分の創った人物と同化し、自ら作中人物そのものになりきるまでその共犯関係を強化するものである。⁴⁾この様に Mauriac は生ける存在を産みだすためには共犯関係は必要条件だと主張する。作者は堕落した人間を高みから描くことはできない。何故なら彼らの方が生きることにはかけて作者より強いから作者をひっぱって行くのである。彼らの情念の闇の中に立ち入るには彼らと一体化しなければその真実は照らしだせないと主張するのである。

かくして、殺人という罪を犯そうとした最も堕落したヒロインの中に自分のすべてを投げこみ彼女と一体化しその情念のすべてを明るみにだそうとして創ったのが『テレーズ・デスケル』である。つまりこれは Mauriac が人間の情念の認識をより深く掘り下げるがために、今までより以上に大胆に自分のすべてを投じて創りだされたものであり、そこでは作中人物を導こうとする作者の立場が全くなくなり、作者は完全に、殺人を犯そうとして罰せられたヒロインの中に同化してしまっている。J. Lacouture は次の様に指摘している。「彼自身の最も深い淵からわき上がってきたこのテレーズを Mauriac は何とコントロールできないことか！ 彼女は彼から全くすりぬけている。それは真実だ。フェリシテ・カズナーヴやレイモン・クレージュが彼の上にのしかかってきたものを越えてそれ以上にうまくいっている創造の自動、自立。」⁵⁾つまりこの作品にはキリスト者 Mauriac が全く影をひそめ殺人未遂犯人テレーズだけが生きているのであり、従ってカトリック批評家が「Mauriac 氏はもはや自分の創りだした人物の師ではなくになっているのは残念だ。」⁶⁾とのべて悲しみを表明しているのも当然であるといえる。

この様に『テレーズ・デスケル』は Mauriac が敢えて信仰者としての立場を捨て、完全に作中人物の意識の中に同化して情念の徹底的探求を目的として創られた作品である。しかもそうすることが自ずと神に近づく道であると信じて。さて Mauriac はこの殺人未遂犯の内面にどの様な真実を見出したのであろうか。そして果して彼はそうすることによって神に近づき得たのであろうか。以下そのことを見てゆきたい。

4) *Ibid.*

5) Jean Lacouture, *François Mauriac*, Seuil, 1980, p. 216.

6) *Ibid.*

II

『テレーズ・デスケル』の物語は、夫殺しという罪を犯したものはどうしても自分の罪の動機が理解できないまま罰をうけ家から追放されて苦しみながらその孤独な運命をたどる一人の聰明な女性の悲劇であるが、Mauriac は、何故彼女の様な聰明な女性がこの様な運命におちいったのか、何故罪を犯し罰を受けるに至ったかを、彼女の心の深淵に入りこみその秘密を明るみにだそうとしている。

まず Mauriac は、罪を犯すに至るまでのヒロインの犯罪心理の分析を通して、彼女の罪が宿命的なものであったことを次のように明らかにしている。

ヒロイン・テレーズは 周辺でもその聰明さが知れ渡っている理性的な女性である。彼女は自分の中にある情熱のどす黒い力に莫然とした不安を感じその不安から逃れるため、家庭という一つの秩序の中に自分をはめこみ、予め危険におちいらない様避難する。しかし、因習に縛られ個人の自由が全く無い、まるで人間の精神が眠りこんでしまったような地方ブルジョワの生活の中で、息のつまる、充たされない日々を送るテレーズの体内で、情熱のどす黒い力は彼女に、生活への不満、夫や周囲の者に対する軽蔑、他人の幸福に対する激しい嫉妬心、孤独感、虚無感などをひき起こす。しかし聰明な彼女はそれらの情慾にさいなまれ苦しみつつも、それらを隠して仮面を被って生活している。しかしある日、ふとした偶然から、彼女の心は罪に誘われ夫のコップの中に毒を注ぎいれる。仮面の下で抑えられていたどす黒い力が一度に罪となってふきだしてきただのである。彼女には夫を殺したいという明確な意識など全く無かったにもかかわらず、狂暴な力によってつき動かされまるで恐ろしい義務を遂行するようにその行為をなしつげたのであった。「私は自分の罪が分かっていない。私は世間が自分におわせたような罪を犯す気持ちはなかった。自分でもなにをしようとしたのか分らないのだ。私の中と私の外にある凶暴な力がどこへ向かってゆくのか自分でも分かっていなかった。その力が進んでゆく途中で破壊してゆくものに私自身おびえおののいているのだから。」⁷⁾ 「私はおそろしい義務に従ったのです。そう……あれはまるで義務の様でしたわ。」⁸⁾ とテレーズは罪の行為を犯すに至った状況を思い出す。

この様に Mauriac は、どの様に理性的な聰明な人間であろうとも、自己が充されない場合には、自己を充たさんと欲する自己愛が、様々な情慾をひき起

7) François Mauriac, *Oeuvres complètes* Tome II, Fayard,

8) *Ibid.*, p. 280.

こし、更にそれが極度におさえられた時には狂暴な力となって殺人にまで至らしむるものであることを明るみにだしている。この情慾の力は余りにも強く抗い難いものであり人間の意志に関わりなく誕生以前からその血の中におかれている様に思えるのである。テレーズは、愛欲に走って家からその存在を抹殺された祖母の血を意識する。また自分の情熱が自分の胎内に宿る子供に浸透しているのを感じ胎児の死を願う。彼女は絶望の余り自殺を決意したとき、自分の存在が消えても自分のおそろしい宿命がそのまま子供に受けつがれていくことを思い愕然とする。「私は出てゆく。しかし私から生まれたこの赤ん坊は残るし、いささかの狂いもなく私の宿命だったものはこの子を通して最後まで実現するだろう。癖や傾向、避けることのできない血の法則。」⁹⁾こうしてテレーズは血から血へと伝えられてゆく情慾に為すすべなく立ちすくむ。

以上のように Mauriac はテレーズの犯罪に至った心理の分析を通して、人間においては、自己を満たさんとする自己愛、つまり情慾は宿命的なものであること、つまり人の罪は宿命であることを示している。

さて次に Mauriac は、夫から許されることなく家から追放され永遠の孤独に罰せられてしまったテレーズの心の深淵に立ち入り、何故彼女が許されることがなかったのか、今度はその秘密を探ろうとする。そしてそこで彼が明らかにしたのは、己れの罪をどうしても認めることのできぬ、人間の傲り高さであった。つまり人間はその傲り高さによって己れの罪を認めることができず、永遠の孤独に罰せられているということである。

テレーズは家の体面を重んずる夫の偽証のおかげで不起訴となり放免されるがしかしそれは偽りの許しでしかない。放免後テレーズは罪を犯した彼女を待ちうけている運命、他人の好奇の目にさらされ、うしろ指をさされながらこそそと生きてゆかねばならぬ果てしない孤独な生活を思いやり恐怖と苦悩に身を苛む。そしてこの孤独な運命からのたった一つの出口である、夫の許しを切望する。そして彼の許しを得んとして彼女は自分のすべてを告白しようとする「告解」の準備を始めるがしかし、彼女は何故自分が夫を殺そうとしたのかその動機がしかとつかめなくて自分の罪を確定することができず「告解」は不可能となってしまう。

彼女は少女時代から「あの娘は自分の中に秀れた人間像を創りだす喜び以外どんな報酬も欲しがりません。良心があの娘の唯一の充分な光です。[……] 優れた人間に属そうとする誇りがあの娘をささえているのです。」¹⁰⁾とほめた

9) *Ibid.*, p. 87.

10) *Ibid.*, p. 183.

たえられてきたように、理性を絶対とする誇り高く傲り高い人間である。そして彼女は「知識欲にもえ、理解し尽くすこと」¹¹⁾「自分自身になりきること」¹²⁾「数多くのエリートの一人となり存在の意味をもつ人間の一人となること」¹³⁾に憧れ、逆に凡庸な人間に対して強い優越感をもっている。彼女は、「まるで若いはちきれそうな豚のように」¹⁴⁾肉の快楽に夢中になり「財産を持っていること、獵をすること、車を動かすこと、食べたり飲んだりすること」¹⁵⁾だけに満足し、「肉体だけが生きて精神が不在」¹⁶⁾のような生活を送っている夫を冷たく眺めていた。彼女にとってそれは「盲目の種属、余りに単純すぎる種属」¹⁷⁾に属している人間であり彼女は心の底で深い軽蔑を抱いている。ところで、彼女が「告解」を始めようとした時まず彼女は、あの単純な男、盲目の種属である夫が果して自分のこの苦しみを理解できるだろうかと思いつかべたのであった。「ああベルナール……自分の知っている中でも最も単純な男。どんな感情だって分類してバラバラに切り離しそれらを結んでいる隘路の網を知らない男。そんな男を私が生き苦しんだあの名状し難い心の領域にどう導いたらいいのだろう。しかしどうしてもしなければならない。」¹⁸⁾こうしてテレーズは夫に理解させるために言葉を探すことになる。自分の理性を傲る彼女の心が論理でもって夫を理解させようとしたのである。自分の様な聰明な人間が理解させられない筈はないという彼女の傲りが彼女を論理の世界、言葉の世界に入りこませていったのである。しかし、人間の罪は論理を越えた不合理なものであり言葉でとらえることは不可能である。敢えて言葉で表わそうとすればそれは宿命としか云いようがないものである。かくて言葉で自分の罪を捕らえようとして求めたテレーズは、それは宿命以外の何ものでもなかったという結論に至るしかなかった。それは自分の罪の責任を認めようとしない自己正当化、自己弁護でしかない。かくて「告解」はならずすべての言葉は消えてしまったのである。

こうして論理の中に自分の罪の原因を探そうとしてからず彼女は「告解」のための言葉を失ってしまったのであるが、しかしそれでも尚テレーズの「許

11) *Ibid.*, p. 225.

12) *Ibid.*,

13) *Ibid.*, p. 223.

14) *Ibid.*, p. 196.

15) *Ibid.*, p. 250.

16) *Ibid.*, p. 204.

17) *Ibid.*, p. 191.

18) *Ibid.*, p. 182.

し」への願望は抑え難く「許し」への希望をつないで夫との対面に向かう。しかし夫を前にした途端又しても彼女の傲りが許しを乞う態度をなくさせてしまうのである。「ベルナールと並んで歩きながらテレーズは、自分がなさねばならぬことが、突然わかったのである。この男が側にいるという事実だけで、さっきまで話し合おう、信じ合おうと考えていた希望がすべてくなってしまったのである。どんなに知っているつもりの相手でも、もしその人が目の前にいなければ我々は彼らを変えて考えるものだ。あの帰り道の間、テレーズは知らぬ間に自分を理解してくれるベルナール、理解しようと努めてくれるベルナールを勝手に作りあげていたのだ。しかし今、夫をちらとみただけでありのままのこの男の姿が浮かび上がった。生涯に一度でも、他人の立場に立ってものを考えることのできない男——自分自身から抜け出て、相手が見ているものを見ようとする努力をしない男。」¹⁹⁾こうしてテレーズは又しても夫に対する傲慢な心によって彼に許しを乞う態度を自ら閉ざし、当然夫から罰を宣告されてしまう。許しを得られないテレーズは苦しみ続けるが、しかし最後にたった一度、夫からの救いのチャンスが与えられようとした時があった。しかしその時にもやはり彼女はその傲りによって救いを得ることができなかった。

彼女がパリで最後に夫と別れようとする時、ふと夫の心が一瞬開き、テレーズへの憐みが生じて彼女に問い合わせを発する。しかしテレーズは待ちに待った許しの言葉が与えられようとする瞬間のそのうれしさにもかかわらず、つい彼女は夫をからかい、見下すような言葉を発してしまったのである。「あなたの松の木のせいだというのを御存知ないの？ そうよ、私はあなたの松の木をひとり占めしたかったのよ。」²⁰⁾「おそらくあなたの目の中に不安と好奇心の色を見たかったのかもしれないわ。つまりあなたの心の動揺よ。さっきからあなたの目の中にあるものよ。」²¹⁾この様な傲慢な言葉が発せられた彼女の心の中は次の様であった。「ついにベルナールが自分に問い合わせかけたのだ。自分がもしベルナールだったらまっさきに心に浮かんだだろう質問を、今ようやくかけたのだ。[……] 自分は知らぬ間にベルナールの心をかき乱し混乱させていたのだ。今彼はまるでものごとがはっきり見えずおずおずとしている男のように自分に尋ねている。昔の様に単純でもなくなり冷たくもなくなっている。」²²⁾この様にテレーズは相変わらず自分ではそれと意識しないまま傲慢な心を持ち続けてい

19) *Ibid.*, p. 245.

20) *Ibid.*, p. 278.

21) *Ibid.*,

22) *Ibid.*, p. 277.

たのである。かくてテレーズから発せられた言葉に夫は怒り、折角開きかけた彼の心は再びとざされてしまいテレーズの救いのチャンスは又しても失われたのである。

以上の様に Mauriac が、許しへの切なる願望にもかかわらず遂に許しを得ることなく罰せられたテレーズの心の闇の中にふみ入って照らしたものは、彼女の傲慢である。この上ない自己愛そのものともいえる傲慢さである。

かくして、人はその自己愛によって宿命的に罪ある存在であり、そして又その傲りによって宿命的に許しに至ることができないという結論を Mauriac は導きだしている。

さて、こうして人間の孤独の宿命性を暴きだしたこの作品のどこに光が見出されるであろうか。ここにはただ絶望の呻きしかないのではないだろうか。Mauriac は『テレーズ・デスケル』のすぐ後に著わした『キリスト者の苦悩』の中で、「情慾は恩寵以外には、死によってしかなくならない。それ以外にどの様にしてこの情慾からいやされるというのか。それは癌であり至るところに伝染する。回心よりも奇蹟的なものはないゆえんである。」²³⁾ という絶望的な叫びを表明しているが『テレーズ・デスケル』はまさしく Mauriac のこの悲痛な叫びを作品化したものにすぎないであろう。ところでこれは、人間性の救い難い腐敗や、情慾の不可抗性を主張し、それからの救いは神から与えられる一方的な恩寵に依る以外なく、人間には一切の自由意志が奪われているとするジャンセニズムの教義そのものから発した叫びである。神から与えられる恩寵という奇蹟を持つ以外に人間はなす術もなく情慾にさいなまれ続けてゆかねばならないのかという絶望の叫びである。『テレーズ・デスケル』を書いて Mauriac が到達したのはまさしくこのジャンセニスト的絶望であったのである。神の選びを待つしかないというのは何という絶望であろうか。我々はただあきらめて束の間の肉の欲びの中に孤独をまぎらわせて生きてゆく外はない。要するに『テレーズ・デスケル』は我々に神を見出させるどころか逆にいっそう我々を神から遠ざからせ、我々に情慾に身を委ねせしむるだけである。

III

かくて我々は『テレーズ・デスケル』が、情念の認識を掘り下げることが神に至る道でもあるとの Mauriac の信念を裏切るものであることを確認し得

23) François Mauriac, *Oeuvres complètes Tome VIII*, Fayard, 1950-68, p. 250.

たと思う。

ところで Georges Hourdin はジャンセニスムに至る原因を次の様に指摘している。「分析の趣味、心理学的占いの才能は、しばしばジャンセニスムと結び付く。自分自身を認識して自分の弱さを計るもの……こういう人は誰もが少しづつ内的宿命論を信じるようになる。心理学の悪魔にとりつかれ、自分自身に余りに夢中になっている人達は、我々の運命は幼年時代から与えられたものであるとし、それを信じようとする。彼らは原罪の重要性を誇張する。彼らは人間の自由の可能性をもはや受けつけない。魂の中に、恩寵の働きを描いたり考えたりすることは自分にはできないと感じる。彼らの目に見ることが許されているのは人間本性のメカニックだけである。」²⁴⁾ Mauriac はこの様にまさしく情念の認識を深めんとする分析の悪魔にとりつかれ、そこに夢中になったのである。そしてその結果ジャンセニスムにおちいり彼は神を見失ってしまった。ここで彼は大きな挫折におち入り自らの文学の在り方を深く反省せざるをえなくなる。そしてしばらくの深い沈潜の後、遂に自らの誤りに覺醒し、真の自己のとるべき道を見出すに至ったのである。次作の『蝮のからみあい』の主人公、ルイは次の様に自分の罪を告白しているがこれこそ Mauriac の自らの誤ちを認める告白であろう。「私は60年間この憎しみで死にそうになった男であった。[……] 私は自分の罪を感じ探していた。それはこの醜い蝮のからみあいの中にあるのではなかった。子供たちへの憎しみ、復讐、金への執着、そんな中にあるのではなく、もつれたこれら蝮を越えたところに求めようとしなかった私の拒絶の中にあったのである。私はこのからみあいがまるで私の心そのものであるかのようにそこにとどまっていたのだ。」²⁵⁾ Mauriac の誤ちは、この様にこの情念という蝮のからみ合いこそ人間の心そのものであるかのようにそればかりにこだわってきたところにあったのである。そしてそれにこだわりそこにとどまるかぎりそこには絶望しかないことを彼は『テレズ・デスケル』を書いたことによって覚醒したのである。このもつれた蝮のむこうに求めないかぎり神は決して表われてこないことを。こうして彼は自分のとるべき方向を確定したのである。『蝮のからみあい』では主人公ルイに上記の様な告白をさせ新たなる光へと向かわしめている。

また Mauriac は自らの信仰態度にも深い反省を促された。それまで彼にとって「人間の犯す悪徳は、道をふみ誤った愛であるが故に、それは彼の心に無限への願いがひそんでいることの証拠」²⁶⁾であると考えられていた。だから

24) Georges Hourdin, Mauriac Romancier chrétien, Les Editions du Temps Présent, p. 16.

25) François Mauriac, *Oeuvres complètes Tome III*, Fayard, 1950-68, p. 512.

こそ彼は罪人の渴きを強調せんとして情念の分析ばかりにこだわっていたのである。しかしこの考えは、彼自身がこのからみあいに魅かれていた証拠、つまり彼が絶対的に自己を憎んでいなかった証拠である。彼の中の自己愛が無意識に情念の分析に向かわしめていたのだ。こうして Mauriac は自己の信仰についても深刻な反省をもち、以後、より深化した信仰へと向かうことになる。そして小説においては、もはや渴きの証明ではなく、人に自己を真に憎ましめるべく人間の悪そのものを冷静に見すえて描きだし、このからみあったまむしの向こうにあるものを人に求めせしめんとする方向にむかうのである。

決 論

以上のように『テレーズ・デスケル』は Mauriac に挫折を与えしめ、彼に信仰の深化をもたらす契機となったと同時に、文学的方法においても、彼のそれまでの、人間の中にある渴きを証明せんとして情念の認識を究めようとする態度から、人間の悪を徹底的に見すえて人に自己を憎ましめ光を求めさせんとする、真のカトリック作家としての態度へと向かわしむる契機となった作品、つまり彼の精神の道程のいわばターニング・ポイントとしての意味をもつ作品であることが分かった。

従来、文学的傑作として非常に評価の高い作品であるが、Mauriac としては、カトリック側からの非難も肯とせざるをえない痛恨の作品ではなかつたろうか。

(D. 1968 梅花女子大学助教授)